

わら蒲団

私が生家を離れるまで、冬になると父は、藁（わら）蒲団を家族全員に作ってくれた。

わら布団とは、稲わらのふさふさと柔らかい部分、わら縄を作る時不必用になった物を、畳一畳くらいの木綿の袋にギッシリ詰めて、敷き蒲団にした物である。

作りたての物は、真ん中あたりは五十センチ位膨んで、まるでベッドに寝るようだった。それが毎日寝ていると、だんだん圧し潰れてペツチャンコになる。それでも二十センチ位はある。

何処の家も、昔は隙間だらけで風通しがよく、衛生的であるが寒い。わら布団に寝ると、体の部分が引込み暖かく都合がよい。まるで豚ツ子がわらに潜り寝ているようだと笑って居たものだ。

粃米を入れて使い終えたセイロと言って、わら布団の大きさを深さ五、六十センチの底なし箱に、わら布団を入れ、掛

け布団を被り寝たものだ。

生家は百五十坪以上もある総二階建てだった。茅葺きで二階の天井にも上がれて、そこだけでも三十坪くらいある。

入り口を入ると土足でも上がれそうな囲炉裏があり、何時も焚き火していて、殆んど煮炊きは此処です。暖房兼用だ。

周りは危なくない様に金属製の枠があり、親子全員周りに腰掛けお茶を飲んだり無駄話したり、着物の前を広げスッポンポンで腹あぶりする、体がよく温まる。

木の燃やし口を木尻(田舎弁でキズリ)と言い母親専用で、その反対側はその家の旦那が腰掛ける専用の横座(よこざ)だ。囲炉裏の上は吹き抜けで、高い天井の二重になった屋根から煙が自然に出て行く。吹雪の日には囲炉裏端(いろりばた)に雪が吹き込んで来る。

兄弟六人、囲炉裏で暖をとり、わら布団に寝た幼い時代を思い出し、今は亡き両親と三人の兄弟を偲ぶ。